

東京・台東区No.68遺跡

たいとうく

所在地 東京都台東区浅草一丁目

調査期間 二〇〇二年（平14）八月

発掘機関 台東区文化財調査会

調査担当者 小俣 悟

遺跡の種類 寺院跡

遺跡の年代 江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

台東区No.68遺跡は台東区の東側、区境である隅田川の西岸微高地の西方に位置し、東京低地西側に立地する。J.R常磐新線（仮称）

新浅草駅出入口建設に伴う
調査である。当地周辺は近
世以前は湿地が広がつてい
たものと思われ、近世には
浅草寺境内であり、嘉永三
年（一八五〇）近江屋板
「下谷浅草箕輪山谷辺図」
では「火除地」あるいは
「田地」とある。

主要な遺構確認面が三面あり、検出遺構は建物基礎・井戸・溝状
遺構・土坑などである。特徴的な遺構として大型の長方形土坑群が
見られる。また最下層には牡蠣殻の堆積層が確認されている。大型
の長方形土坑は牡蠣殻層から牡蠣を採取した遺構とも推定される。
木簡は大型の長方形土坑（第三八号遺構）から出土した。この土
坑の推定廃棄年代は一九世紀第三四半期である。なお、その遺構群
の中を抜ける溝状遺構（第一九号遺構）からは、焼印のある桶蓋（径
一一〇mm厚一〇mm）が出土した。桶蓋に栓孔があることから液体の容
器と思われ、焼印はその商標と推測されるが、「○」の中の文字は
釈読できない。第一九号遺構の推定廃棄年代は一九世紀第三四半期
である。他に貝殻（ハマグリの内面）などに墨書のあるものが見られ
る。

出土遺物は独楽・魚籠などの木・竹製品のほか、多量の近世・近
代陶磁器などである。また特徴的な遺物では台東区内の土器焼きと
して著名な今戸焼関係の刻印を有する焜炉などがある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「鳶
壺人」

90×60×5 011

小型の板材で、裏側が二次焼成によりかなり炭化している。左上
を大きく欠損しており、その部分に一字あつた可能性がある。内容



(東京東北部)

木簡出土遺構の概要
台東区No.68遺跡は台東区の東側、区境である隅田川の西岸微高地
の西方に位置し、東京低地西側に立地する。J.R常磐新線（仮称）

新浅草駅出入口建設に伴う
調査である。当地周辺は近
世以前は湿地が広がつてい
たものと思われ、近世には
浅草寺境内であり、嘉永三
年（一八五〇）近江屋板
「下谷浅草箕輪山谷辺図」
では「火除地」あるいは
「田地」とある。

木簡出土遺構の概要
台東区No.68遺跡は台東区の東側、区境である隅田川の西岸微高地
の西方に位置し、東京低地西側に立地する。J.R常磐新線（仮称）

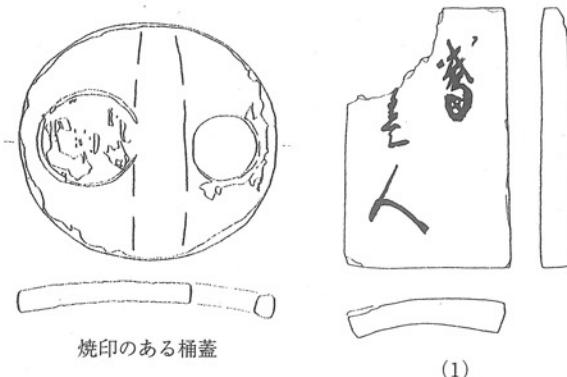
新浅草駅出入口建設に伴う
調査である。当地周辺は近
世以前は湿地が広がつてい
たものと思われ、近世には
浅草寺境内であり、嘉永三
年（一八五〇）近江屋板
「下谷浅草箕輪山谷辺図」
では「火除地」あるいは
「田地」とある。

は鳶の人数が番号などを示唆すると思われるが、確証はない。何らかの札と推測されるが、丸く反つており違和感がある。またミニチュアの桶とも思われるが、厚さが一様ではなく他の部材もみられず判断し難い。

9 関係文献

台東区文化財調査会『台東区No.68遺跡』(二〇〇四年)

(小俣悟)



木簡研究 第二〇号

卷頭言—機器の目・人の眼—

和田萃

一九九七年出土の木簡

概要 平城宮跡 平城京跡(1) 平城京跡(2) 青野遺跡 藤原宮跡 酒

船石遺跡 長岡宮跡 長岡京跡 左京二条四坊三町 長岡京跡右京六

条二坊六町 平安京跡右京三条一坊三町 平等院庭園 細工谷遺跡

大坂城跡 天満本願寺跡 堺環濠都市遺跡 東浅香山遺跡 猪名庄遺

跡 屋敷町遺跡 加都遺跡 明石城武家屋敷跡 境谷遺跡 茂利宮の

西遺跡 安坂・城の堀遺跡 大將軍遺跡 大脇城跡 濱名川遺跡 明

治大学記念館前遺跡 千駄ヶ谷五丁目遺跡 山崎上ノ南遺跡B 地点

西原遺跡 松本城三の丸跡小柳町 松本城下町跡伊勢町 三輪田遺跡

一本柳遺跡 志羅山遺跡 三条遺跡 上高田遺跡 山田遺跡 払田柵

跡 大光寺新城跡遺跡 福井城跡 金石本町遺跡 戸水大西遺跡 堅

田B遺跡 七尾城下町遺跡 蛇喰A遺跡 二口五反田遺跡 清水堂F

遺跡 下ノ西遺跡 中倉遺跡 大御堂廃寺 三田谷I遺跡 有福寺遺

跡 高田遺跡 百間川米田遺跡 津寺遺跡 末原窯跡群(灰原上層)

萩城跡(外堀地区) 高松城跡 觀音寺遺跡 上長野A遺跡 香椎B

遺跡 博多遺跡群 魚屋町遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二〇) 藤原宮跡

积文の訂正と追加(二) 山垣遺跡 桂狭遺跡(深田地区) 桂狭遺跡
入佐川遺跡 出雲国序跡

再び長屋王家木簡と皇親家令について

八木充

長野特別研究集会の記録

信濃の古代と屋代遺跡群:寺内隆夫、七世紀の屋代木簡:傳田伊史、
七世紀の地方木簡:鐘江宏之、七世紀の宮都木簡:鶴見泰寿、律令制
の成立と木簡—七世紀の木簡をめぐつて:館野和己

書評 佐藤信著『日本古代の宮都と木簡』

新刊紹介 大庭脩編著『木簡—古代からのメッセージ』 丸山裕美子
頒価 五五〇〇円 送料六〇〇円 仁藤敦史